

# 「海の口開け・口閉め」の神事と伝承 —青ヶ島での事例から—

土 屋 久\*

## Oral Tradition of the Shinto Ritual, “Uminokuchiake and Uminokuchijime”

Hisashi TSUCHIYA

### 1 はじめに

「口あけ・止め」の民俗は、磯物や貝類、木の実や野草などを共同管理するための慣習である。上記のものを採取する際の解禁と終了を示す制度であり、海に関わる「口あけ・止め」を「磯の口あけ・止め磯」、山に関わるのを「山の口あけ・止め山」と称することもある。また、「口あけ・止め」に当たり、神事が執りおこなわれることもあり、本稿で事例とする青ヶ島もその類いである。しかし、青ヶ島では、現在、急速にかつての民俗が姿を消しており、「口あけ・止め」に関する慣行も、ここ暫くおこなわれていなかった。こうした中であって、2008年、「海の口開け・口閉め」神事（以後、「口開け・口閉め」神事）が再興された。本稿では、この再興された神事と神事に関わる伝承についての報告をおこないたい。

### 2 調査地概況

青ヶ島は、有人島としては伊豆諸島の最南端に位置し、現在（2008年12月）人口は180人〔青ヶ島村総務課 2008:1〕で、日本で最小の自治体を形成している。島は、回りを黒潮の好漁場に囲まれながらも、良港に恵まれず、漁業は盛んでなかった。目の前に海を見ながら、かつては、食卓に魚がのぼることも少なかったようである。1953年頃の子どもの作文に以下の文章が書かれている。

この間、ぼくが三宝港でつりをしていると、カノー（アウトリガー付きのカヌーのこと-土屋）で酒や金をもって内地の発動機船に行つて魚をかって来た。ぼくはくやしくなつた。この

\* つちや ひさし 文教大学生生活科学研究所客員研究員

島には船はあっても、カノーや小さいてんまなので、よい風でないとなつりにでられないから、魚はあんまり食べられない [東京都青ヶ島村立青ヶ島小中学校 1998:40]

青ヶ島の漁業は、現在でも盛んとはいいがたい。『青ヶ島村政要覧』(2008年4月1日現在)によると、2006年度の農林水産物生産高の総額が46,403千円である中で、農業が37,530千円、水産業が8,730千円となっており、水産業は、農業の1/4程の数字である。

ところで、この青ヶ島に漁業協同組合が設立されたのは1979年で、これにより漁業権が設定された。島民の記憶によると、「口開け・口閉め」に関する民俗は、少なくとも漁業協同組合が設立されてからおこなわれていないという。

2008年10月現在、漁業協同組合には30名程の人が加盟している。この中で、実際に船をもっている人は8名、船も各自1隻ずつで8隻である。船は、港から波の届かない高所へクレーンを使用して上げるため、必然的に大きさが限られてくる。現在ある船は、だいたい3~4トンクラスである。春から秋にかけて、海が比較的穏やかな時期にカジキマグロやトビウオ、カツオなどを狙う。船には、一人で乗ることが多いという。現在、漁業のみで生計を立てる島民は存在せず、花卉園芸や畑作、建設業などの他の生業との複合により生計を立てている。離島という限られた空間の中で、島民が地域資源をいかに活用しているのかを記述する作業は、生活文化論的にも大変重要なことではあるが、漁の詳細共々別項に譲りたい。

### 3 神事の次第と伝承

#### 3-1 神事の概況

青ヶ島は、その厳しい自然条件から救いを信仰世界に求め、多数のカミヤホトケが祀られ、祭祀もかつては年間20、30回を数えた。本稿で扱う「口開け」神事は、「口閉め」神事とセットとして、神事群の中に位置づけられてきた。狭義の神事自体は青ヶ島の祭祀集団<sup>1)</sup>により、毎年、前者が旧暦2月3日に、後者が旧暦9月13日に金毘羅神社でおこなわれてきた。しかし、漁業関係者を交えての広義の神事は長らくおこなわれていなかった。今回、金毘羅神社で祭祀集団によりおこなわれた狭義の神事と平行して、漁業関係者は共同作業で木製の鳥居<sup>2)</sup>を作成し、それを神社(金毘羅神社)の参道に建立した。その後、漁業関係者は金毘羅神社に参拝し、祭祀集団の成員ともども社殿で直会をおこなった。2008年におこなわれた神事の次第は以下の表の通りである。

尚、2008年度は、「口閉め」神事で鳥居の奉納がおこなわれなかったため(金毘羅神社への参拝と直会のみ)、「口開け」神事の次第を事例として挙げる(写真1、2、3、4参照)。

2008年度「口開け」神事次第(3月10日)<sup>3)</sup>

<漁業関係者>		<祭祀集団>	
8時頃	鳥居の作成開始		
9時頃	漁業関係者が三々五々集まり共同作業となる		
		10時頃	カヌシ、金毘羅神社にて御幣切り開始ミコが徐々にあつまり、金毘羅神社の祭壇に線香をあげたり <sup>4)</sup> 、ローソクに灯を灯したりする
		12時半頃	金毘羅神社にて湯立て開始
13時半頃	鳥居に文字を書き入れる		
16時半頃	金毘羅神社参道入り口に鳥居を建立	16時40分頃	金毘羅神社の神事終了
17時頃	漁業関係者が三々五々集まり、金毘羅神社の祭壇で拜む		
		17時過頃	漁業関係者、祭祀関係者が金毘羅神社に集まり直会開始



写真1 湯立て



写真2 カンヌシの太鼓と祭文・経文に合わせて舞うミコ



写真3 鳥居製作の共同作業



写真4 鳥居の建立

以上が、この度再興された「口開け・口閉め」神事の概要である。この神事では、本来あったはずの漁の解禁と終了を示すといった機能はなくなり、漁の安全と豊漁を願い、収穫に感謝するとともに神事に集った人びとの親睦を深めるという形へ、その機能が変容していることを付言しておきたい。

### 3-2 神事に関わる伝承

「口開け・口閉め」神事にはさまざまな別称があり、「口開け」神事は「船主の祭り」、「口閉め」神事は「船頭の祭り」と称されることがある。何故なら、かつて、「口開け」神事の直会では、船主が船の乗組員に御馳走を振舞い、「口閉め」神事では、船頭が振舞ったからだと説明される。また、以前の直会は、金毘羅神社前の広場で盛大におこなわれ、その際、「口開け」神事では船毎に互いに酒を飲ませ合い、相手の船子を潰し合う慣習があった。一方、「口閉め」神事では、来年度の船子確保のため、船頭同士のスカウト合戦がおこなわれた。また、直会では、黒潮本流の中に船を出すという、危険な漁に対する心構えが先輩から後輩に伝えられたともいう。

## 4 おわりに

ここで、若干の結論めいたことを述べておくと、今回再興された「口開け・口閉め」神事と伝承の中から垣間みられることの一つに「共同と競争」の原理があると考えられる。鳥居製作における共同作業、また、かつての「口開け」神事の直会の際におこなわれた酒の飲ませ合いは、「内」に対しては結束を強め、「外」に対しては競争心を煽っているといえよう。この「共同と競争」の原理が、黒潮での漁という、危険な作業を安全に、しかも能率よくおこなう上で大切となってくるのはいうまでもなからう。

「口開け・口閉め」神事には、この他にも営業活動の場、教育の場としての機能もみられ、かつての青ヶ島の神事は多様な側面もっていたことがわかる。青ヶ島の神事の研究は、神懸かりをするミコや島外からもたらされた宗教との関係に力点がおかれ、祭文・経文類の研究が手つかずになっていることはよく知られている。しかし、生業を始めとした島の生活との関係から神事を考察しようとする視点が少なかったこと<sup>9)</sup>については、余り指摘がなされていない。「口開け・口閉め」神事を研究の俎上にあげることにより、今まで手薄であった研究領域への糸口が見つかるのではないかと考える。

### 註

- 1) カンヌシ（神主）やシャニン（社人・舎人）と呼ばれる男性神役とミコ（巫女）と称される女性神役とからなり、カンヌシの叩く太鼓と唱える独特な祭文・経文のリズムに合わせてシャニンやミコが舞うといった形式で神事は進行する。
- 2) 鳥居の製作についてもさまざまな伝承がある。例えば、木材は青ヶ島で伐採されたものを使用、木の株は北にする等がある。
- 3) 青ヶ島の神事は、総て旧暦でおこなわれるため、毎年神事がおこなわれる日が変わることとなる。2008年度の旧暦2月3日は新暦3月10日に、旧暦9月13日は新暦10月11日に相当する。
- 4) 青ヶ島では、カミにも線香を供える。
- 5) 以下の著作には、萌芽的ながらこの視点がみられる。[小林 1991]、[今村 1989]。

## 文献

- 青ヶ島村教育委員会・青ヶ島村勢要覧編集委員会 1984『青ヶ島の生活と文化』青ヶ島村役場  
青ヶ島村総務課編集・発行 2008『広報あおがしま1月号』
- 安室知・小島孝夫・野地恒有 2008『日本の民俗1海と里』吉川弘文館
- 今村文彦 1989「青ヶ島の生業と祭祀」『伊豆七島における島世界の民俗学・文化人類学的研究—空間（海・島・山）と儀礼をめぐって—』筑波大学歴史・人類学系発行
- 蒲生正男・坪井洋文・村武精一 1975『伊豆諸島—世代・祭祀・村落—』未来社
- 小林亥一 1980『青ヶ島島史』青ヶ島村役場、1991「青ヶ島の信仰—島神信仰を中心として—」『海と列島文化第7巻 黒潮の道』小学館
- 佐野賢治・谷口貢他 1990『現代民俗学入門』吉川弘文館
- 東京都青ヶ島村立小中学校社会科副読本改訂委員会編集 1998『わたしたちの青ヶ島（改訂版）』
- 野本寛一 2008『生態と民俗—人と動植物の相渉譜』講談社学術文庫
- 橋浦泰雄 1949「協同慣行」『海村生活の研究』国書刊行会
- 最上孝敬 1949「漁場使用の制限」『海村生活の研究』国書刊行会

## 付記

本稿は、2008年10月小笠原でおこなわれた「研究交流フォーラム：島民と考える小笠原の可能性」（主催：日本島嶼学会）での発表をもとに、それに大幅な加筆・修正をおこなったものである。